

基礎研 レター

新型コロナウイルス接触確認アプリ (COCOA)利用意向が強いのは誰か

～普及の鍵は、個人情報取り扱いの安全性と、アプリ利用メリットの更なる周知

保険研究部 准主任研究員 村松 容子

Email : yoko@nli-research.co.jp

6月に厚生労働省による「新型コロナウイルス接触確認アプリ COCOA」がリリースされ、7月3日以降、陽性者と接触した場合に通知を受け取ることができるようになった。新型コロナウイルス感染症の感染拡大の防止と経済活動の両立を進めるにあたっての期待が大きい。アプリへの関心は高く、7月13日の17時時点で680万件ダウンロードされている。7月以降の感染の再拡大にともない、経済活動との両立のため、ここ数日でもダウンロード数は1日数万件にのぼる。

アプリダウンロード数としては、かなりの人気と言えるが、日本の人口1億2千万人に対して、5%強にとどまっている。

ニッセイ基礎研究所が行った「[第1回新型コロナによる暮らしの変化に関する調査](#)」によると、6月末の時点で利用意向があったのは4割だった。利用者が多くなるほど、効果が期待できるだけに、どういった人の利用意向が強いのかについて分析を試みた。

1——利用意向があるのは全体の4割～60歳代で意向が強い

接触確認アプリの利用意向を尋ねた結果、利用意向がある（「ぜひ利用したい」「場合によっては利用したい」）のは41.3%、利用意向がない（「今のところ利用したくない」「絶対に利用したくない」）のは30.1%だった。「接触確認アプリを知らない・聞いたことがない」のは5.7%だった。

属性別にみると、男性と比べて女性で、若年と比べて高年齢で、利用意向が強く、60歳代では半数近くの利用意向があった。ただし、今回はインターネット調査であるため、アプリ利用意向は国全体の60歳代と比べて強いと思われる。

一方、20代では、「接触確認アプリを知らない・聞いたことがない」が1割を超えていた。地域別にみると、感染者数が多いとされる関東地方、近畿地方、北海道で利用意向が4割を超えて高かった。一方、比較的、感染者数が少ない中国・四国地方では、利用したい計が利用したくない計を下回った。

¹ 2020年6月26～29日に実施。インターネット調査。対象は、全国に住む20～69歳の男女（株式会社マクロミルのモニター）。有効回答2,062。

図表1 属性別 接触確認アプリ（COCOA）利用意向

	N	利用したい計			どちらとも いえない	利用したくない計			接触確認アプリ を知らない・聞 いたことがない	
		ぜひ 利用したい	場合によっては 利用したい			今のところ 利用したくない	絶対に 利用したくない			
全体	2,062	41.3	12.7	28.6	22.9	30.0	25.0	5.0	5.7 (%)	
性別	男性	1,032	39.6	14.1	25.5	23.9	30.1	24.2	5.9	6.3
	女性	1,030	43.0	11.3	31.7	21.9	30.0	25.8	4.2	5.0
年齢別	20代	320	39.4	11.3	28.1	24.4	25.4	19.1	6.3	10.9
	30代	402	36.5	12.9	23.6	23.1	34.1	27.1	7.0	6.2
	40代	474	37.8	9.7	28.1	25.3	32.1	26.4	5.7	4.9
	50代	399	43.1	11.3	31.8	22.8	29.4	25.1	4.3	4.8
	60代	467	48.8	17.8	31.0	19.5	28.5	25.9	2.6	3.2
地域別	北海道	119	42.0	12.6	29.4	21.0	31.1	23.5	7.6	5.9
	東北地方	121	39.6	10.7	28.9	25.6	28.9	24.8	4.1	5.8
	関東地方	765	42.8	15.7	27.1	22.5	29.8	24.4	5.4	5.0
	中部地方	368	40.0	11.7	28.3	23.4	31.0	26.1	4.9	5.7
	近畿地方	384	46.1	12.5	33.6	21.4	27.1	24.0	3.1	5.5
	中国地方	97	33.0	7.2	25.8	21.6	37.1	33.0	4.1	8.2
	四国地方	37	24.3	2.7	21.6	32.4	37.8	29.7	8.1	5.4
	九州地方	171	36.3	8.8	27.5	25.7	30.4	23.4	7.0	7.6

（注）全体と比べて高いセルに網掛け（5%有意水準）（以下、同じ）

（出典）ニッセイ基礎研究所「第1回新型コロナによる暮らしの変化に関する調査」（特に断りがない限り以下、同じ）

2—利用意向があるのは、不安を感じていて行動を自粛している人

どういった考え方の人の利用意向が強いのだろうか。

調査対象者を新型コロナウイルスに対する不安の有無、各種行動や行動時間の増減、感染の収束や経済の回復等の展望に対する考え方で分けた6つグループ別に利用意向をみる。

グループ（クラス）分けには、「[第1回新型コロナによる暮らしの変化に関する調査](#)」の質問のうち、不安の有無に関する質問24問、行動や行動時間の増減に関する質問13問、感染の収束や経済回復等への展望に関する質問11問の計48問を使って、潜在クラス分析を行った。クラス分けの詳細は、[前稿「新型コロナ感染拡大防止に向けた行動の自粛の状況」](#)をご参照いただきたい。各クラスの概要は図表2のとおりである。

図表2 各クラスの概要

クラス	特徴
クラス1	あらゆる面で不安を感じており、デパート等での買い物や娯楽施設の利用の面では行動の自粛を行っている。ただし、就労世代が多いことから、移動やスーパーでの買い物の自粛度合いはやや低い。感染の収束や経済の回復には悲観的であるが、デジタル化、キャッシュレス決済等の新習慣等の定着への展望は明るい。
クラス2	クラス1と同様にあらゆる面で不安を感じており、買い物や移動等の行動を行っている。年齢層が高いことから、収入に対する不安はクラス1より低い。移動等の自粛はクラス1より徹底している。感染の収束や経済の回復には悲観的であるが、デジタル化、キャッシュレス決済等の新習慣等の定着への展望は明るい。
クラス3	もっとも不安を感じていないクラスで、移動や買い物、娯楽施設の利用等の行動の変化は少ない。デジタル化への展望は明るい、感染の収束、経済の回復、新習慣等の定着には否定的である。
クラス4	各種不安は少なく、感染の収束や経済の回復への展望が明るい。移動等の行動については、減少している人と増加している人が混在している。デジタル化や新習慣等の定着には否定的である。
クラス5	不安の有無や行動について「該当なし」の回答が多く、年齢層が高いことから、普段から活動が少ないと思われる。感染の収束や経済の回復、デジタル化の進展、新習慣等の定着については否定的だった。
クラス6	不安の有無、行動の増減、将来展望いずれも「どちらともいえない」と回答しており、主な特徴は見いだせなかった。

（出典）[村松容子「新型コロナ感染拡大防止に向けた行動の自粛の状況」ニッセイ基礎研究所 基礎研レポート2020年7月14日](#)

各クラスのアプリ利用意向は図表3のとおりである。新型コロナウイルスに対してあらゆる不安をもち、買い物や移動等の行動の自粛を行っているクラス1、クラス2の利用意向が高く、普段から活動が少ないと思われるクラス3、クラス5の利用意向が低い。あまり不安を感じていない比較的若い人が多いクラス4は、1割程度が「絶対に利用したくない」と回答しており拒絶感があるようだった。また、不安の有無、行動や行動時間の増減、将来展望について「該当しない」「どちらともいえない」と回答していたクラス5、クラス6は、「接触確認アプリを知らない・聞いたことがない」が1割を超えて高くなっていった。

図表3 属性別 接触確認アプリ (COCOA) 利用意向

	N	利用したい計			どちらとも いえない	利用したくない計			接触確認アプリ を知らない・聞 いたことがない	(%)
		ぜひ 利用したい	場合によっては 利用したい			今のところ 利用したくない	絶対に 利用したくない			
全体	2,062	41.3	12.7	28.6	22.9	30.0	25.0	5.0	5.7	
ク ラ ス	クラス1	647	50.2	16.7	33.5	19.2	28.3	24.7	3.6	2.3
	クラス2	400	47.5	14.0	33.5	17.5	31.6	27.8	3.8	3.5
	クラス3	274	39.8	12.8	27.0	19.0	34.7	28.5	6.2	6.6
	クラス4	274	37.2	12.4	24.8	24.8	30.7	21.2	9.5	7.3
	クラス5	257	28.8	6.6	22.2	25.7	34.6	28.8	5.8	10.9
	クラス6	210	24.7	5.7	19.0	44.3	20.5	16.7	3.8	10.5

3—個人情報漏洩の不安は、どの程度影響しているか

接触確認アプリ (COCOA) のさらなる普及に向けては、個人情報漏洩に関する不安の払拭が課題とされている。そこで、上記クラス別に、個人情報漏洩に対する考え方、およびインターネットによるサービスが増加することに対する不安や期待の状況をみると、全体で「個人情報が保護されない事態が生じる不安」を感じているのは、半数程度にのぼった。

特に、クラス1とクラス2で、比較的接触確認アプリの利用意向が強いクラスで不安を感じる割合が高い。クラス1とクラス2は、あらゆる不安が多いクラスであるため、それ以外にも「キャッシュレス決済サービスが使いこなせない不安」「SNSの投稿や閲覧が増えることで、ネット上のトラブルが増える

図表4 個人情報漏洩に対する考え方、およびインターネットによるサービスが増加することに対する不安や期待

	N	事 態 が 生 じ る 情 報 が 漏 れ な い に	よ よ 感 染 コ ロ ナ の 公 表 り や 厚 生 開 発 働 働 省 に	使 い こ え な い セ ル ス の 決 ま り な い 決 算 シ ス テ ム の 不 安 な ら ず	増 え る こ と に 対 し て の 不 安 な ら ず	進 歩 的 な サ ー ビ ス の 利 用 が 進 ん で い く よ う な に な る こ と に 対 し て の 期 待 が 高 い	(%)
全体	2,062	46.3	19.6	23.8	55.7		
クラス1	647	62.2	24.2	35.5	70.6		
クラス2	400	67.1	29.3	35.1	67.3		
クラス3	274	17.5	5.1	3.3	61.3		
クラス4	274	41.3	32.1	30.3	33.9		
クラス5	257	34.7	8.2	9.0	43.2		
クラス6	210	16.7	3.4	2.9	24.3		

不安」も高かった。ただし、不安に感じている一方で、今後「国や企業のオンライン対応が進み、デジタル化が進展する」と考えている割合は高かった。

接触確認アプリの利用意向が弱いクラス3は、今回の調査で尋ねたあらゆる項目に対して、不安を感じている割合が低く、個人情報漏洩やインターネットによるサービスが増加することへの不安も低い。このクラスは、新型コロナウイルスに対する不安があまりないことから、アプリへの関心が低いと思われる。同じく、利用意向が弱いクラス5も、個人情報漏洩やインターネットによるサービスが増加することへの不安が比較的低い。このクラスは、普段から活動が少ないと考えられるクラスで、「接触確認アプリを知らない・聞いたことがない」の割合も高い。接触確認アプリに関する情報が少ない可能性がある。

「絶対に利用したくない」と回答した割合が高かったクラス4は、個人情報が保護されない事態が生じる不安が特に高いわけではないが、キャッシュレスサービスが使いこなせないことやネット上のトラブルが増えることへの不安は高い。接触確認アプリだけでなく、各種サービスのデジタル化、オンライン化への拒否感を持っている可能性がある。

4—個人情報の取り扱いの安全性以上にアプリ利用のメリットの周知が必要

以上のとおり、全体の半数程度が、感染状況の公表や厚生労働省によるコロナアプリの開発などによって個人情報が保護されない事態が生じる不安を感じていた。

しかし、特に不安が高いクラス1とクラス2は、アプリ利用意向が強い。クラス1とクラス2は、個人情報漏洩についての不安も高いが、それと同時に、新型コロナウイルス感染拡大や、感染拡大の経済への影響等に不安を感じており、アプリ利用のメリットを優先させたものと考えられる。一方、個人情報漏洩への不安が低いものの、新型コロナウイルス感染拡大や感染拡大の経済への影響への不安も低いと、接触確認アプリを入れるメリットを感じにくい可能性がある。

現状では、アプリの主な利用者は、新型コロナウイルスに対する不安が高く、行動を自粛している人となり、不安を感じておらず、相対的に行動の自粛度合いが弱い人で利用が進まない懸念がある。

今後のさらなる普及のためには、個人情報の取り扱いの安全性の周知以上に、例えば、すでに陽性判定をうけたアプリ利用者1人につき、アプリを通じて何人ぐらいに通知が送られたのか、そのうち何人ぐらいが陽性となったのか、ある1日にどの程度アプリ利用者と接触したのか等の情報等、アプリ利用によってこれまで得られなかった情報が得られるなど、アプリ利用のメリットを感じられる運用を行うことが必要だと考えられる。